



【小説】なるかく
【挿絵】とめきち

立ち読み版

子づくり委員長 美少女たちと孕ま性活

序章	学級委員長は大忙し	006
第一章	ツンデレ生徒会長と婚約エッチ	026
第二章	図書委員長のエッチなお勉強	083
第三章	風紀委員長は超エロエロ	121
第四章	同居生活の予行演習エッチ	152
第五章	三人は仲良し、時々ライバル？	197
終章	子づくりはまだまだ始まったばかり!?	250

登場人物紹介

Characters



ふじさき みか
藤咲美華

学園の生徒会長。気が強く、媚を売ってくる人を嫌うため、生徒会の仕事を一人でやってしまう。

かわせ まゆる
川瀬真由瑠

恥ずかしがり屋の図書委員長。性格に反して豊富なスタイルが特に男子の視線を集めてやまない。

やまむら
山村ちな

元気いっぱい真面目な風紀委員長。中性的な容姿もあいまって女生徒から告白を受けるほどの人気がある。

しんくにあゆむ
真国歩夢

困っている人を見るとつい手伝ってしまうお節焼きの男子生徒。そのため、よく委員長たちに手を貸すことに。

エッチな本とかで、こういう事してたから……」

途端に不安げな顔になり尋ねられ、慌てて首を左右に振る。

「い、いやそんな事ないよ。唯、美華と真由瑠にはされなかったから、ちよつとビックリしちゃって……とつても気持ちいいよ」

返答を聞いた少女は、顔をパアツと笑顔にして嬉しそうに頬を赤らめる。

「えへへ、良かった。それじゃ、一人がしてあげなかった事をわたしがもつとしちゃう。はあむッ！ んちゆうッ……れりゆれりゆ、チュちゆうッ」

唾え直すと同時に、優しかった口使いとは打って変わって強烈に吸い付いてきた。口の中の唾ごと、剛直を吸るいやらしい音が耳に響く。

「！ そ、それ……あッう！」

思わず顎が反ってしまう様な愉悦が全身を駆け巡る間にも、ちなは今の気持ちを表す様に激しく口奉仕を続け、肉棒は一気に反り返ってしまう。

「ん、ンうッ……ちいうううッポンッ！」

もの凄い吸い付き後に解放された股間は、限界まで肥大して全体が唾液でべつとり濡れ、彼女の唇と透明な糸で繋がる。

「はあ……とつても元気になったね……」

動物がじやれる様に甘く嘯くと、舌を出して竿の表面に付いた口液を舐め取ろうとする。まさか彼女がここまでしてくれると思っていなかった少年は、余りのいやらしさと刺激

に大興奮し、逆上せてしまいそうだった。

「歩夢くん……わたしもう、我慢出来ないから……」

少女は立ち上がり、体をモジモジとさせながら少年を誘導する。

洋式便座の上に座らされ、ちな自身も向かい合わせになりこちらの膝の上に座った。

（うわ、こ、この格好……な、なんか妙にエッチだ……）

少女の体重は軽く、全く気にならない。それよりも、下げた視線からスカートがギリギリ股間を隠す、大股開きの格好にドキドキしてしまう。細く見える太股が意外にも肉肉な感触を持っている事に気付く程心地いい。

「……それじゃ歩夢くん、はい」

官能的な光景と感触に惚けていると、どういう訳かこちらの両手を取って制服の襟元に誘導される。意図が掴めず首を傾げると、

「……………脱がせて」

短かくても、とてつもなく強烈な意味を含んでいる言葉を吐かれた。

「！ぬ、脱がせる……」

他の二人とした時は、自分から知らぬ間に手を伸ばして剥ぎ取っていたが、今回は同じ脱がせるでも全くタイプが違う、女の子にお願いされてからの脱がせるである。

「歩夢くんに脱がせて欲しいの……お願い」

言いながら、こちらの制服とシャツのボタンをあっと言う間に外し、上半身を裸にされ

てしまう。そして歩夢も、普段身嗜みをすっかり指導している風紀委員長の制服を、ドキしながら、慎重に脱がせ始めた。

（こ、これがちなちゃんの……おっぱいなんだ）

シャツのボタンを外し、現れたのは薄い緑色の下着。その生地は同年代の少女と比べて慎ましく膨らむ乳房を左右から寄せ、少しでも大きく見せている様に見える。

「……ごめんね。おっぱい、ちっちゃくて残念だよね……」

胸の下着姿に釘付けになっていると、体付きを気にしていたちなは少し落ち込む。

「いや、僕は好きだよ……」

「……真由瑠ちゃんや、美華ちゃんよりも小さいの？」

「確かにそうかもしれないけど、とつても可愛い大きさで……はあ……僕は今直ぐにでも触っちゃいたい位興奮してる」

少年には片思いしていた少女の小さい胸も、とても魅力的に見える。それを証明する為
に両手を下着越しの美乳に伸ばす。

「ひゃうッ」

緩やかに膨らむ乳房に触れた瞬間、肩を弾ませて可愛らしい悲鳴が漏れた。

「とつても柔らかくて、このままずっと触っていたいな……」

心を感じた事を、そのまま口に出す。

そうする事で少女も段々と不安そうだった顔を緩め、変わりに頬を染めてゆく。

「わたしのおっぱいで、興奮しちゃったの？ ……それじゃあ、もつと触って」

嬉しそうに微笑み、背中を反らせて小さな胸を突き出してくる。

少年は遠慮せずブラジャーに指を引っ掛けてずらし上げた。すると寄せられていた小さい丸みがぷるんつと弾み、谷間が少なくなってしまったが元気いっぱい乳首を尖らせる美乳が露になった。

「ん……歩夢くんにおっぱい見られて……あふうッ……それに、触られるととってもドキドキっちゃう……ンッ！ ち、乳首……あ、アッ」

ブラジャー越しとは比べ物にならない優しい感触の美乳をこね回しつつ先端の可愛らしい桃豆を指で摘むと、甘い吐息の艶が増して耳を痺れさせる。

「気持ちいい？ ちなちゃん」

「うん……あッ、とっても気持ちいい……どんどんエッチになっちゃう」

彼女はこちらの肩に片手を置き、もう片方の手でスカートを捲る。ほんのりと肉付き始めた尻と太股を覆うショーツが露になったと思つた矢先、腰を更に近づけてきてズボンから剥き出しの勃起に密着させた。

「！ う、うわちなちゃん、そ、それ……あッ」

ショーツ越しの女裂で、ペニスの竿部分をぐりぐりと擦られる。滑らかな生地奥に感じる生温かくて柔らかい肉割れの感触が刺激的過ぎて、胸に添えた手の動きが止まる。

「えへへ……歩夢くん、下着でおちんちん擦られるの気持ち良さそうだよ」

こちらの反応を見るや、更に背中を波打たせて腰をくねらせ、動きを大胆にし始めた。

「そんなにしたら……こ、このまま出ちゃいそうッ」

「ダメだよ。我慢して……もつと我慢して、最後は沢山気持ち良くなってもらうから」
彼女は妖しく囁きながら腰を振り、硬度を増していく男根を責めてくる。

（が、我慢つてそ、そんなぁ……ううッ。本当にエッチな事に積極的）

高まる射精欲を必死に堪えながら風紀委員長の隠された性癖を知り、この短時間でお互いの距離が心も体も一気に縮まった事を実感した。

「ち、ちなちゃん本当に……も、もうダメ、これ以上は……」

口奉仕を受け、更に下着越しの股間愛撫で疼きが止め処なく溢れてきた肉棒はビクビクと脈打ち、今にも弾けそうになってしまう。

「はぁ……はぁ……わたしも、もう限界い……」

それはちなも同様で、腰の動きを止めると恥丘を覆う下着部分を横にずらした。すると綺麗な縦割れが走った女部が顔を出し、物欲しそうに蜜を溢れさせて濃厚な香りが漂う。

「歩夢くん。入れちゃうよ……入れちゃうからねえ……」

上気した少女は体を浮かせ、肉貝の合わせ目を勃起の先端にあてがってくる。

こちらが首を縦に何度も振る前に、少女はもう浮かせた股をゆつくりと下ろし始めた。

「あ……んうッ！ 歩夢くんのが、にゅうーって、あ……アッ！」

肉先がゆつくりと、女穴の中に入り込んでいく。何度も窄まる入り口付近に刺激され、

背中にゾクゾクと絶頂感が這い上がってくるが、少年は歯を食い縛って我慢する。

「ンッ!? あぁッン〜ッ」

突然、相手の声色が変わり射精を我慢しながら己の分身を確認すると、半分程埋まったペニスの竿に処女の証が流れ落ちていた。

「あ……ちなちゃん、初めてだったの？」

歩夢は思わず口に出してしまふ。性的な事に積極的な少女故に、てつきり経験があるのではないかと想像していたからだ。

「初めてだよ、んッ……エッチな事は好きだけど、でも初めては、好きな人に……歩夢くん、あげたかったから……」

瞳に痛みと嬉しさが入り混じった涙を溢れさせて微笑んでくる。

その姿に胸を打たれ、優しく抱き寄せて艶やかな唇に口付けた。

「ん……チュ。歩夢くんのキスって、性格と同じで優しく……ちゅ、はむ、チュ……初めてでもそんなに痛くなく思えちゃう」

風紀委員長もこちらの首に腕を回し、キスをし返す。

「ちなちゃん。無理そうだったらまた今度でもいいからね」

「うん、ありがと……でも歩夢くんと最後までしたいし……そんなに痛くないから、続けちゃうよ……んうッはああ……ああ、もうちよつとお……ああッ」

両足を震わせながら、再びゆっくりと腰を落とし始める。肉棒が道内を擦ると時折体を

弾ませて、膂肉も一緒に収縮し雄棒を締め上げてきた。

慎重に、そしてゆっくりと挿入は続き、ついに根元まで飲み込まれてしまう。

「はああ……歩夢くんのが、全部入っちゃったあ……ひヤッ！ 先つちよが奥を突いてる……ん、ンッ……おちんちんエッチ過ぎるよお……」

痛む相手を思い、暫くは抱きしめてあげて体を動かささないであげようと思っていると、何と彼女は自ら直ぐに腰振りを開始した。

「！ ちなちゃ、んうッ！ ちよ、ちよつと待つて」

「ダメ、待てない……はあ、あンッ！ 歩夢くんの、こんなに硬くなつて、熱くて……我慢なんて、出来ないよお。はあ、アッ、あふうん！」

日常では絶対に聞けない色っぽい声を出しながら、元気いっぱい腰を打ち付けてきてトイレにいやらしい音が響く。

—— ぱちゅん、ぱちゅんッ、ぱちゅッ、ぱちん。

「ううッ！ も、もう少しゆつくり……あ……じゃないと、もう出ちゃいそうだし、それに誰かが来たら……」

慌てて抱きしめて止めようとしても、腰のくねりで快感を与えられてしまう。しかも、普段誰も使用しないトイレと言えど、必ずしも人が来ないとは限らない。

「ダメえ、と、止められないのお、はあ……ンッ！ あ、アッ！ ココ気持ちいい、これ……んひゃあッ！ おちんちんの出っ張りがあ、はああッ！ 擦つてるう！」

今回は見張り役も居ない状態だが、ちなはこんな状況でも刺激に酔いしれる。

膣肉の程を、反り返った肉棒の膨らみが擦り上げる度により大きな淫声を漏らし、華奢な体をビクビクツツと痙攣させて小さな乳房を揺らす。そして彼女は一番感じる場所を入念に刺激する為、更に腰を大きく波打たせ始めた。

「！ し、締めて……こ、これ、凄過ぎ……」

風紀委員長が感じるポイントを突く度に女道が収縮し、元気いっぱい肉棒に抱き付いて扱とき上げてきた。腰に力を入れて堪えようとしても、ヌメる襷に擦られまくり、あつと言う間に思考を溶かされてしまう。

「も、もうダメッ！」

差し迫った絶頂感に我慢出来ず、こちらも精一杯突き上げ始める。

「ああッ!? んう！ あ、歩夢く……いきなり突いちゃ……ひやふうッ!!」

今まで動いていなかった少年が責め始めた為に結合が深まり、急に最奥を突かれたちなは目を見開いて体を反らす。

「はあ、はあ。ちなちゃん、ちなちゃんッ！」

相手を気遣いながら少しでも長く繋がっていたいと思っていたが、そうも言っていられない程興奮してしまった。小さな尻肉に手を回して掴み、全力で男根を打ち上げる。

「はあんッ！ アッ！ あああッ！ 歩夢くん、だ、ダメえ、わたしがう、動きたいのに、ひやあッ!! おちんちん、激しく、んはああッ！ シちゃだめええッ!!」

中程の一番感じる場所と最終地点を全力で突き始めると、少女は背中を反らせたまま喘ぎ悶える。曲げられていた細い足がゆつくりと伸ばされていき、履いている靴までもが脱げそうな程体がはねる。

「ああ……可愛いおっぱいが揺れてるッ」

動けば動く程美乳が揺れ、艶かしい姿が堪らず、腰振り続けながら首を伸ばした。

——あむッ。ちゅうッ、チュパッ！　ちゅちゅッ！

「え？　ひゃ！　お、おっぱ、あッ！　吸われてるう！」

片方の乳房の突起に吸い付き、舌を蠢かせて舐め回す。

ちなは驚きつつも胸から感じる刺激に目を細め、喉の奥から滲み出る快感悲鳴を漏らす。

「はああ、はあ……歩夢くんお、お尻も、わたしのお尻……お願い」

胸を唾液塗れにして責めていると突然、小尻を掴む手を取られその谷間に誘導される。

一体何をして欲しいのだろうかと疑問に思っていると、

「んう！　こ、ココ……クリクリッとして……あああ、いけないお穴、ほじつてえ」

何と、肛門の穴に指先が触れた途端、心地良さそうな声でねだってきた。

「！　ち、ちなちゃん……そんなエッチ過ぎる事を……」

まさか風紀委員長が尻穴責めを望んでくるとは思っておらず、そのギャップがまた少年の性欲を昂らせ、尻肉を揉みながらショーツ越しに両手の人差し指で肛門をこね回す。

「あああああッ！　しゅ、しゅご……いいッ！　んう！　お、おま〇こ突かれながら、お、

お尻……お尻同時にいッ！」

可愛らしい皺窄みを指先でゆっくり解し、中に入るか入らないかといった所で愛撫する。前の穴と後ろの穴。両方を責めると少女は臀部を切なそうにヒクつかせ、今までに無い程官能的な喘ぎを出して体を揺らし、最後に向けて腰を振り乱してきた。

「ああい、イッちやう……わたし、も、もうイッちやうよおッ!!」

絶頂が迫っている事を大声で訴えながらも、性運動を止めようとしなない。

「ん、ンッ! はああくく、汗と……それにヌルヌルのお、え、エッチな匂い、いやらしいすぎいッ! あああわたしいやらしい事してイッちや、あああ! イッちやううッ!!」

交わる肌の淫香や股の雌臭を、ちなは心地良さそうに嗅いで歯止めが利かなくなる。

そんな官能少女に歩夢も昂りながら、もつといやらしくしようど激しく突き上げた。

「ああ、ちなちゃん! だ、出すよ……もう出しちゃうからねッ!」

止められないペニスの疼きもついに限界を迎えて弾ける間近。じわじわと迫り上がる熱液を感じ、足が震えてしまう。

「出してえ、歩夢くんの、沢山奥に、あああッ、ビュビュッて出してえ! ん、ンッ! わたしの中にたつぷりしてえ、子供、歩夢くんの赤ちゃん頂戴い!」

そう。これは同居生活の証明をしている為でもあり、子供を必要とする彼女の為にしているセックス。それを認識し、己の肉棒をより深く突き刺して追い込みを掛ける。

「はあ、はあちなちゃんッ、ちなちゃんッ!!」

少女の唇を奪い、強く抱きしめながら爆発寸前肉棒の一撃をお見舞いする。

「んちゅふうッ!! んんう、い、きゅ……イきゅううッ!!」

口を塞がれ渾身の官能刺激を受けたちなは、目をギユツと瞑って体を痙攣させた。

細い体が絶頂のリズムを刻み、それに合わせる様に腔肉も一物をしゃぶり上げてくる。
(で、出るッ! ちなちゃんに、僕のを、全部出すう!!)

——ドビユルウッ! ドビユッ! ドブリユッ! ドビユビユッ!

「んちゅはああ!! す、凄いい! で、出て……一番奥に、ドビユッてえ!!」

雄液を受け、少女は背中だけでなく顎までも仰け反らせて射精に合わせビクつく。

「ああ……沢山……お腹の奥が……歩夢くんので、沢山だあ……」

奥まできっちり挿入している筈なのに多過ぎて結合部から溢れ出る精液は、華奢でほっそりとした内太股をねっとり濡らしていく。

寝起きの様におぼろげな絶頂声で、未だに放出されるモノを逃がさない様に少女は軽い体重をしつかりと掛けてきて、抱き付きながら余韻に浸った。

「はあ……はあ……歩夢くん……もう一つ、お願いがあるんだけど……」

すると、息を整えつつ汗を浮かばせた蕩け顔で頬を染め、恥ずかしそうに何かを願う。

「……その……美華ちゃんと真由瑠ちゃんみたいに……わたしの名前も、呼び捨てにして」
まるで子が親に物をねだる様ないじらしい上目遣いで言われれば、断れる訳がない。

「うん。いいよ……ちな」



「ちよ、ちよつと歩夢！ どういう事よ！ アンタもまたって言つてたわよネッ!!」
心地いい絶頂に浸り、真由瑠にキスをしようとしたが挿入時に一度達していた事を気付かれてしまい、歩夢は顔の左右から二人の手に挟まれて無理矢理逸らされる。

「あ、い、いやそれは……その……」

言い訳を考えている内に、厳しい顔つきの美華と頬を膨らませるちなから命令され、正座させられる。全裸状態で生徒会長と風紀委員長に見下ろされ、尋問される情けない格好。
「じゃあ……真由瑠ちゃんに、二度もツ、出しちゃった歩夢くんにはエッチな指導をしちゃおうかなあ〜」

一部分だけ言葉を強調した快活少女が、艶掛かった微笑を向けて近寄ろうとした。が、
「ちよ、ちよつと待ちなさいよちな！ ここは生徒会長としてアタシが歩夢にエッチな……アッ！ い、いや指導をするからッ！」

ここはアタシがと名乗り出る美華が割って入ってくる。
「え〜でもお………あ」

不満そうに拒否の色を浮かばせていたちなだったが、何かに気付いて顔色を変えた。

「うん。いいよ美華ちゃん！ それじゃ、エッチな歩夢くんを指導しちゃって！」
一体何を考えているのか一変し、生徒会長の背中を押して促す。

「え？ あ、う、うん………で、でも指導って……ど、どうすれば……」

あっさりとした承された美華は戸惑い、正座して指導を待つ自分に何をすればいいのか解

らず救いの手を求める。

「えへへ。えつとねえ……」

いやらしい事が大好きな友人に耳打ちされた生徒会長は、徐々に目を見開いて口をポカーンと開け、顔を真っ赤にした。

「ほ、本当に……そんな事するの？」

「うん。前シた時は、とつても喜んでたよ」

密議を終え、渋々ながらゆつくり正座をしこちらと向かい合わせになって睨んでくる。
(……い、一体何をされるんだろ……)

今からされる事をあれやこれやと想像し、恐怖と興味が入り混じって緊張した。

「い、言っとくけど……ちな言う通りにするだけだから……あ、アタシが自分からやるんじゃないんだから、そこを間違えないでよねッ！」

何の事なのかと戸惑っていると、突然強気な彼女が上半身を倒して四つん這いになり、その小さくてぷつくらとした唇で勃起した一物を飲み込んでしまった。

「!? み、美華何をッ！ うわ、し、舌、がッ」

あの生徒会長に啜えられた。その事実が強く頭に焼き付いて、刺激が襲ってくる。

「レリゆ……んはあ、エッチな味がする……あッ、ちよ、ちよつと歩夢！ 今出したばかりなのに、硬くし過ぎよ馬鹿ッ」

表面に残る液の味に、一瞬うつとりしそうになったが直ぐに上目遣いで咎めてきた。

「だ、だつて……うッ！ み、美華に唾えられてるって思ったら興奮しちゃう、から……」
プライドが高い恋人が、四つん這いになって己の一物を口に入れる可能性を全く考えていなかった故に、驚きと共にその興奮も飛びつきり。

ぶかぶかなシャツ一枚な姿の為、襟元からは下向きに膨れる豊乳が乳首まで丸見え。なだらかな背中のラインを辿れば、白くて薄い生地からうっすら透ける尻の窪みがそそり、何よりも美華が上目遣いで口奉仕をしている事が一番の興奮要因だった。

「こ、興奮て……ば、馬鹿ねッ！ 何を言ってるのよ……ま、前にシた時に気持ち良さそうだったからつて言われたから……シてあげただけよ……」
目をハツとさせて泳がせ、太股に添えてくる両手の指先を照れ隠し気味に遊ばせる。

「え？ 言われたから……何？」

「!! な、何でもないわよッ！ ほ、ほら指導の続き、し、シちゃうからねッ！」
ごまかすと一旦放した肉棒を勢い良く唾え直し、竿や亀頭に舌を這わせてきた。

「うわ、ま、またッ！ ……ああ、うわッ」

少し臆病な粘膜は、男の形を確かめる様にくすぐってくる。

(み、美華にまた、舐められてる……も、もつと……もつとッ)

唾えられ、舌で舐められるだけでも十分に刺激的なのだが、贅沢にも更に気持ち良くしてもらいたいと欲望が働いてしまう。

「ううッ……み、美華……先をもつと舐めて……」

「? ……レリゆ、レロレロレロお」

首を傾げつつも、美華は言う通りに亀頭の頂点に舌を当てて上下に舐め回してくる。

「ああッ! そ、そうそんな感じで……それに、もつとし、下側を、グリグリッて……」

エラの内側や下部の竿との境界線を、言葉通りの舌使いで責められる。見えない口の中でどういふ動きをされているのかが鮮明に感じられる上に、自分のシャツを着て、自分の思いのままに奉仕を続ける生徒会長がとてつもなくいやらしく思える。

「うわ、す、凄いッ……美華、と、とつてもエッチで可愛い……も、もつと顔、動かして」

「!? ンばあッ、え、エッチで可愛いって……ちよ、調子に乗らないですよッ……も、もう

……はあむッ……んちゆ……ジュブ、ジュルッ、こ、これへひひんれひよッ! んる、れるるう、じゆぶ、ジュブッんぶッ」

口を離して頬を真つ赤にし睨んできたのも束の間、直ぐに啞え直して要望通りに頭を前後に振り、口内の滑りと圧迫で抜いてくる。

褒められてどこか嬉しそうな美華を見下ろし、己の物が奉仕される姿に言い様もなく興奮していると、どんどん動きはエスカレートしていった。

「んじゆ……んばあッ……硬い……れりゆれりゆ……チュウウ……歩夢のお、熱過ぎい……はむッ、ジュブッ……ジュブ……ジュポッジュポッ、ちゆるるう……チュルッ!」

唾液の滴る肉竿に舌をチロチロと当てて舐め取ろうとしたり、舌を絡ませながら激しくしゃぶつたりと、全く命令していないのに目を蕩かせた彼女は奉仕に夢中になっていた。

(み、美華つてもしかして、責められるの好きだから、こ、こういうのも好きなの?)
連続で絶頂する様なエッチが好きなら生徒会長は、本当に責められたり命令されたりする
のが性癖なのだろうと、歩夢は股に顔を埋める恋人を見て実感した。

「み、美華も、もうで、出ちゃいそうだよ……」

先程二度も射精したばかりなのに、振り返った肉棒が瞬く間に射精欲を復活させる。

「んちゅ……ぱあッ……そ、そう……じゃ、じゃあえつと」

「美華……はあ……はあ、美華ッ」

一物を口から放した相手と早く繋がりたい。その気持ち爆発し、我慢出来ず押し倒す。

「きゃッ! ちょ、ちよつと歩夢ッ!」

床の布団にうつ伏せとなった美華が驚く中、膝立ちになって彼女を見下ろせば、白シヤ
ツの裾がギリギリ艶尻を隠している光景がいやらし過ぎる。

「美華……お尻を上げて」

強気な彼女の従順な姿をもっと見てみたい。そう思い、優しく命令する。

「! ど、どうしてアタシが……」

「頼むよ、美華……はあ……美華を、もっと見たいから」

拒もうとしたが再度お願いすると暫し悩んだ末、顔を真っ赤にして両目を閉じ「し、仕方ないわね……こ、今回だけよッ」と口答えしつつも、上体を布団に着けたままゆっくりと尻を浮かせる。

（おお……こ、これは……）

生徒会長が要求通りに尻を高く上げれば、自然とシャツが捲かれて綺麗な曲線が露になる。張り出した二つのぷりつとした膨らみがこちらの股間と同じ位置まで浮上し、尻谷間に窄まった秘門と、そして既に雌蜜が溢れ出る綺麗な恥裂が全開になる。

「み、見ないでよ変態ッ……だ、だから見ないでつてばッ！ も、もう早くしなさいよッ」
恥ずかしいのを隠す為なのか、少しでも肉棒との距離を縮めようと尻をくねらせた。

「そんな事言つて……はあ……美華のココは、もう準備出来てるよ」

素直じゃない言葉で非難しても、本当は繋がりがたくて仕様がなない。そんな熱の籠もった視線で振り返る恋人の尻肉を掴み、左右に割り開いて勃起をあてがう。

「ひヤッ……んう、か、硬いのが、あ、アッ！ ……んううッ」

ゆっくりと剛直で女道を割り開けば、美華はブルブルと身震いする。

やはりよく窄まり締め上げてくる感触を振り切る様に、一気に腰を突き出した。

「きゃふううッ!? あああお、奥……あ、ああい、イッ……イクうッ!!」

ほんの一突き、一番感じる最奥を小突いただけで生徒会長は背中を反らして目を見開き、ツインテールを揺らしながら堪らず絶頂してしまった。

「美華……イッちゃったんだね？」

「!! ち、違う……い、イッてないわよお……ふうー……ふうー」

尋ねるとハツとして頬を真っ赤にし、否定するが熱い息遣いは隠せない。

「ダメだよ、本当の事言つて……ほら、もう一回、気持ち良くしてあげるから……」
奥まで挿し込んだペニスをゆつくりと、入り口から零れ出してしまう所まで引き返して尻に添えた手に力を入れ、一気に腰を突き出す。

「え？ あ、だ、ダメ……も、もう一回なんて——」

——ズブチュンツツ!!

「あッ、だ、ダメええあああああうツ!!」

瞬時に高くて甘い悲鳴を漏らし、再度激しく痙攣する。絶頂に連動するかの様に、唯でさえ狭い膣内も激しく収縮する。

「ううツ! ……はあ、はあ……どう美華？ またイッちゃったよね」

「だ、だからあ……はああ……い、イッてない……そんなんじや、全然イかないわよお」
意地を張つて絶頂を隠しつつ、もつと奥を責め続けて欲しくてわざと達していないと強情になっている。それを振り返る蕩けた吊り目から理解した。

「……解つたよ美華。もつと気持ち良くしてあげるからねツ」

今にでも果ててしまいたいような肉棒で、恋人を気持ち良くしようと全力で振り乱す。

「!! んう、あ、ああま、またい、イクう! んう……あ、ああと、止まらな……これえ

……あああだ、ダメえま、また……い、イッ……クううううツ!!」

揺れ続ける髪の毛や口から漏れる唾液と快感声。そして彼女の絶頂痙攣も止まらない。

「うわあ……美華ちゃん。ずつとイッてるの? ……凄いい」

腰を尻に打ち付ける度に、うつ伏せの生徒会長が果てる姿を見たちなが目を丸くする。
「美華ちゃんて責められるのが大好きなんだねえ。えへへ、じゃあわたしも責めちゃお」
いたずらっぽい笑みを浮かべ、一体何をするのかと思いきや風紀委員長は美華に寄り添うと、尻に手を忍ばせる。

「ひゃッ！ え、何？ ち、ちな何を……きやううッ!!」

太股を撫でながら結合部に進入した指先は、連続絶頂中の少女の張り出した豆に触れた。
「ほら美華ちゃん。この出っ張り、クリクリッてされるのはどう？」

「ち、ちなああんッ！ だ、ダメ、そこ触っちゃ、あああい、イクううッ!!」

指先で陰部突起を弾かれる度に、同じくスタイルのいい体も弾ける。

（！ ま、また凄く締まるッ）

一方で歩夢は、思わず挿入を止めてしまう程の強烈な締め付けに見舞われていた。連続で絶頂する彼女の膣内は一瞬だけでなく、常時しがみついてくる。蜜液でヌメる襞にびったりと密着された肉棒を動かせば、直ぐに果ててしまうと本能で感じた。

「はああ……美華さん。さっきのお返しですよ……」

必死に射精を我慢している間に、息を整えた真由瑠も生徒会長の横腹に近寄る。

「ええ？ ま、真由瑠待って、ま——」

そして止める声も虚しく、図書委員長の指先はうつ伏せの腹へと伸ばされて、シャツのボタンを外し床布団に押し付けられる胸の尖りを捕らえるとキュウツと摘む。



ので、昼食をとる前に教室を抜け出し購買部でパンと牛乳を買い、今に至る。

（……まさか、真由瑠はここで僕を襲ったりしないよね……）

多少積極的になってきたとはいえ、まだまだ受身の彼女はプライベートで体をねだつてくる事はあったものの、流石に学園ではないだろうと安心する。しかしどこか一抹の不安を抱き、恐る恐る図書室の扉を開ける。

「あ……歩夢さん。す、すみませんわざわざ……」

中には本を抱えて本棚の整理を始めている真由瑠が居た。こちらに気付いていつもと同じく少し申し訳なさそうに眉毛を下げて微笑んでくる。

「い、いや大丈夫だよ……それじゃ、僕も手伝おうかな」

内心ホッと胸を撫で下ろし、持ってきた昼食を机に置いて駆け寄り、仕事を手伝う。

「よいしょ……ここは終わったね……それじゃ、次はどの本棚？」

「あ、い、いえ……そ、その……えっと……きよ、今日のお仕事はこれで終わり、です」尋ねると、どうしたのか真由瑠はハツとして言い淀み、反応を窺いながら答える。

「え、そうなの？ ……もつとあるのかなと思つてたけど……」

少しだけ本の整理と貸し出し確認をしただけで、もう終わってしまった。これだけの量なら彼女一人だけでも昼休憩中に十分出来る筈なのだがと疑問に思う。

「そ、それは……その、え、えっと……」

首を傾げていると、図書委員長は何かを言いたそうにしながら視線を泳がせて制服の巨

乳前で指先同士を突き合わせる。

「……あ、歩夢……さん……」

徐々に頬を染めていき、ついには耳まで真っ赤にしてしまう程恥じらい始めた。

「ど……どうしたの真由瑠」

「！ い、いえそ、その……あッお、お昼まだ、でしたよね……お弁当にしませんかッ」

様子がおかしくて心配になり声を掛けると、慌てて提案してきた。

一体どうしたのだろうかと思いつつ、机に隣同士で座り一緒に昼食を取るのだが、やはり何かを言いたそうにしているのは明らかだった。

(ど、どうしたんだろ……僕から聞いた方がいいかな？)

歩夢が紙パックの牛乳にストローを挿しながら迷っていると、

「………よ、よいしょっと」

弁当を食べていた真由瑠は一旦箸を置き、座っている椅子をジリジリと近付けてきた。

唯椅子がずれてしまっただけなのだろうかと思ひ、歩夢は少し距離を空ける。

「ッ………」

だが気のせいではなかった様で、彼女は無言のまま再び椅子を近付けて、ほんの少し肩を擦り寄せてくる。

「？ ……ど、どうしたの真由瑠」

「あッ、い、いえそ、その……」

尋ねるとビクッと震える程驚き、慌てて距離をとる。暫し沈黙が流れたが、

「……歩夢さん……今日の朝、ちなさんと……そ、その……エッチ……したんですか？」

図書室の中で掻き消えてしまいそうな小さい声で、真由瑠は尋ねてきた。

「!? ど、どうしてそれを」

何故知っているのかと動揺し、飲んでいた牛乳を噴き出してしまいそうになる。

「……………教室で見たちなさんが……………とつても嬉しそうだったので……………た、多分……………そうじゃないかと思って……………それを見て私……………や、ヤキモチ……………焼いちゃいました」

俯き、モジモジとする真由瑠は説明を続ける。

「だから……………わ、私もその……………歩夢さんに図書室の仕事を手伝ってもらったのは……………わ、私とそ、その……………あうう」

重要な言葉を口にしようとすると、頬を真っ赤にして口を閉じてしまう。

少年は、どうして彼女が一人でも終わらせられる仕事を手伝う様に求め、そして隣同士なのに更に体を寄せてきたのかを理解する。

「……………真由瑠」

これは、恥ずかしがり屋な恋人の精一杯のアプローチ。そうとは気付かず避ける様な真似をした事を心で謝り、肩をそっと抱き寄せる。

「あ……………歩夢、さん……………ンツ……………チュ」

肩に触れただけでも驚く少女の唇に、お詫びのキスを優しくする。

こちらの制服の胸元を両手で掴み、しがみ付いてくる様は怯える小動物に似ていた。「んはあ……………み、ミルクの味がします……………」

目をうつとりと潤ませ、図書委員長は湿った唇の表面を舌でチロリと舐める。

その姿を見て男の昂りが増し、止まるタイミングを逃してしまい再び口付けた。

「あふっ……………んっ……………歩夢さあん。そ、そんなにされたら……………チュ。歩夢さんと……………し、しちゃいますよ？ 私から……………歩夢さんを、お、襲っちゃいますよ？」

「うん。ヤキモチ焼いて、エッチな事シたくて堪らない真由瑠に襲われちゃうよ」

「！……………んっはあうう……………あ、歩夢さあん」

自分の意思を伝える事で、言葉に弱い恋人はそれだけで感じ始める。

襲われると言った一方で、彼女が手を出し易い様に自らズボンのジッパーを下げて一物を取り出した。

「……………そ、それじゃあ……………い、今から……………え、エッチな歩夢さんを……………た、沢山気持ち良くしちゃいますからね」

勇気を振り絞る少女は床に膝立ちになり、制服の胸元をはだけ巨乳を覆う下着を、恥ずかしそうに目を瞑って引き上げた。抑圧を失った乳房がたぶんと揺れて露になる。

「……………そ、それじゃあ……………あんっ……………はああ……………歩夢さんの、挟んじやいましたあ」

椅子に座るこちらの両足の間に体を割り込ませた真由瑠は胸の谷間に肉棒を挟み込む。

（うわっ……………や、やっぱり挟まれるの凄く気持ちいい……………）

今まで何度か肌を重ねる事はあったが、胸奉仕を受けるのは久しぶり。二つの膨らみに包まれただけでも非常に心地良く、少し揺すられただけであつと言う間に勃起する。ほぼ完全に膨張してもなお、乳の中にすっぽりと覆われてしまう程恋人の胸は大きい。

「ん、ンッ……はあく……歩夢さんののが、も、もう硬くなつてきちゃいましたね……
そ、そう言えば……私、歩夢さんの為に、ひ、一つ勉強してきた事があるんです」

乳肌にペニスが擦れただけでも感じてしまう少女は思い出し、上目遣いで告げてくる。
口の中で唾液を溜め、何をするつもりなのかと思っているとそれを胸の谷間に垂らし、巨乳に浸透する生温かい唾液は中に埋まり込んだ分身の先端から竿に流れ落ちていく。

「！ あ、こ、これ……うわ、す、滑つて……ああッ」

ヌメリにコーティングされた肉棒が、ほんの少し胸と擦れただけでもどかしい愉悦となつて体に響く。余りの気持ち良さにペニスが反り返ろうとして反応した。

「ひゃうッ!? あ、歩夢さんのが……胸の中で、ピクピクッて……あふう……」

乳肉の中で悶える一物の感触を感じた恋人は、もどかしそうに体を揺らした。

「あ、あの……歩夢さん……私のえ、エッチなお勉強……き、気持ちいいですか？ ……
た、楽しい、ですか？」

「うん……とつてもいい。ううッ……それに、とつても楽しいよ」

以前とは違う感触に何度も頷く中、勉強してくれた真由瑠は嬉しそうに頬を緩ませた。

「よ、良かったです……子供は早く欲しいですけど……思い込んじゃうとストレスに

なって、良く無いらしいので……で、ですから、もつと楽しんで、え……エッチしましよ
うね、歩夢さん」

今後の事も考えて色々勉強してきた少女は、安心して胸摩擦を続ける。

「そ、それじゃあ、動いちゃいますね……ん、ンッ……はあ……前と違って、こういう動
きは、ど、どうですかあ？」

横乳に添えた手で大きな胸を支えながら上下に揺るだけでなく、右胸と左胸を個別に
こね回す様な動きで中身を締められ、揉みくちやにされる感触が背筋を走る。

（うわッ！ な、中が擦れ回って……う、ううッ……き、気持ち良過ぎるッ）

時折亀頭のエラが胸の谷間から覗いては隠れるを繰り返して刺激され、気を抜けば今に
も果ててしまいそうだった。

「はあ、はあ……真由溜も、気持ち良くなって……僕のおちんちんをおっぱいでゴシゴシ
しながら、乳首ピンピンッてされて、もつと感じて」

お返しとばかりに、こちらも巨乳の先端で尖る両乳首を指先でくすぐる様に刺激する。

「きゃふううッ!? あ、ンッ！ ち、乳首触っちゃ、あふうんッ!!」

感じ易い場所を指で軽く転がしただけでも身震いし、目を細めて甘い悲鳴を上げた。

「苛めちゃダメですよお、はうう、ん、ンッ！ ……あ……さ、先つちよが、覗いてます
……はあ……はあ……お、お返しですよお」

勉強熱心な恋人は視線を下げ、胸から飛び出した先端に熱い息を吹き掛けてくる。

うっとりとした垂れ目でそれを見詰め、ゆっくりと首を伸ばしていき、

「……はむうッ……ん、ンッ……レリユ」

何と、竿を胸に挟んだまま先端を咥え込んできた。

「!? ああ、ま、真由瑠、そ、それ……うわッ!」

興奮して大胆になっていいのか、意外にも舌は恐れる事なく亀頭を舐め回し、ねっとり絡んで抜いてくる。全く異なる刺激を二つ同時に受けた肉棒と体がはねてしまう。

「ん、ちゅ、チュ……こうひうのお……歩夢さん、チュ……しゅきです、かあ?」

小鳥がついばむ様な口付けを先端にお見舞いされ、今度は舌を口から伸ばしてチロチロとくすぐってくる。

「ま、真由瑠え、エッチ過ぎるッ……ああ、お、おっぱいも口も、え、エッチ過ぎッ」

「んンッ!? はううう……チュパあッ……だ、だつてえ、歩夢さんに気持ち良くなつてもらいたくてえ……んはあ……」

指摘すると図書委員長は恥ずかしそうに性感で感じながら理由を説明する。今まで受身だった少女が自分の為に学び、こうして襲ってくる。男としてこれ以上嬉しい事は無い。

「ありがとう真由瑠……エッチなおっぱいと、いやらしい舌使いで……うッ……僕、今にも出ちやいそうだよ」

「あ、そ、そんな……あッんンッ……う、嬉しいですう……も、もつとシちやいますね」
いやらしい言葉を交えつつ素直にお礼を言うのと、図書委員長はふつくら盛り上がる尻を

くねらせて嬉しそうに顔を赤くし、再び先端を口に含む。先端に唾液塗れの舌が這わされる度に、吸ったり吸い付くいやらしい音が図書室に浸透していく。

「んちゅ、レリユウ……ちゅ、チュ……ん、はあふう……ん、ンツ」

新しい口液が肉棒を伝い、どんどん熱とヌメリを帯びていく谷間で竿を抜かれつつ、亀頭を小さな粘膜でなぶられる。噴出しそうな射精欲を堪えながら少しでも長くこの甘い刺激を味わいたいと思うものの、流石に限界が近付いてしまう。

「うううッ！ ま、真由瑠も、もう……で、出ちやいそう」

「ん、ンツ……チュパあ……は、はい……私もぞくぞくしてます……はふう」

言葉責めと乳首の摩擦ですっかり上気してしまった少女は色っぽく蕩けた垂れ目で見詰め、巨乳から肉棒を解き放つ。胸の谷間と竿は唾液と汗でべつとりと濡れ光っていた。

「……あ……そ、それじゃあここに横になって下さい……」

すると真由瑠は机の上の何かに気付き、床に敷かれた空きダンボール箱の布団の上に寝るよう促してくる。立ち上がるとこちらを見下ろし、

「ッ……は、恥ずかしいので……あ、余り見ないで、下さいね……」

両目を瞑るとスカート穿いたまま手を中に差し入れ、ショーツだけをゆつくりと脱いでいく。その際に剥き出しの巨乳が下に艶かしく弾み、ポリウレームを痛感させられた。

「あ……お、おっぱいばかり見ないで下さい」

その視線に気付いた恋人は、慌てて胸を両手で抱える様に隠してしまう。

先程まで殆ど躊躇わずに胸責めをしていたのにと思うものの、やはり初心な恋人。

「ッ……いい、入れちゃいますよ、歩夢さん……襲っちゃいますから」

図書委員長はこのまま立ち姿を見られるのが恥ずかしくなったらしく直ぐに跨がり、一氣に腰を落として繋がる。

「んッ……は、ああ……アッ、入って、きます……」

着たままのスカートの中に肉棒が入り込んで見えなくなるが、肉先にはしっかりと温かくて柔らかい膣道の感触。奥へ奥へとどんどん飲み込まれていくのが解る。

——チュププウ……ズチュンッ！

スカートの中で肉棒がヌメる壁に撫でられながら最深部に達したいやらしい音がし、上に乗る真由瑠の体が反り返ると同じく巨乳もはねる。

「はあああ……ハッあ……入っちゃいましたあ……あ、歩夢さんが、中に、ん、ンッ」

「うん、入っちゃった。うう……真由瑠の柔らかいエロエロま〇こに、ズボッて……」

「はうッ!? あ、そ、そんなエツチな言葉……はああ……私が襲ってるのに、歩夢さんはダメですよ」

咎めつつも決して本気で怒っている訳ではない事を、柔らかい笑みから感じ取る。

「そ、それじゃあ……えっと……あ、後はコレを……」

すると、真由瑠は何故か先程少年が飲んでいた牛乳を手を取った。喉が渴いて飲もうとしているのかと思ったが、

「……は、はい……歩夢さん」

恋人は上体を前に倒し、片手をこちらの頭横に突く。たっぷり実った乳房が目前に広がり、少し首を伸ばしただけでもピンクの豆に吸い付けてしまう距離だった。

「え？ い、一体何を……あッ!!」

何をして欲しいのか考えていると、片手に持った牛乳パックのストローの先を胸の乳首に当てた。そしてようやく、何をしようとしているのか理解する。

「ッ……わ、私のおっぱいミルク……ンッ……た、たっぷり飲んで下さいね……」

自分自身で言葉にしただけでもいやらし過ぎて感じてしまうのを見て、歩夢も今まで与えられなかった状況に、戸惑いよりも興奮が勝ってしまう。

——あむッ、ちゅ、チュウ……んく、んく……チュウちゅ。

「あ、ひゃッ、んンッ、の、飲まれてますう、あ、あああッ歩夢さんに、吸われて……乳首とストロー、二つ同時に軽く吸い付いて牛乳を飲む。」

（こ、これ……本当に真由瑠のを飲んでみたいッ）

ほんのり甘い味が口に広がり、まるで彼女の母乳を飲んでる様でとても昂る。

「あ、歩夢さん……お、美味しいですか？ わ、私のおっぱい……」

「ん、最高……真由瑠の大きなおっぱいミルク……もつと飲みたい」

言い終えると、牛乳パックを空にする勢いで更に強く乳首を吸い上げた。

「あああッ!! 歩夢さ、アッ! そ、そんなに吸っちゃ、い、イツちゃ、うううッ!!」

片方の突起だけだというのに、恋人は全身を細かく震わせて絶頂する。同時に挿入中の膣肉も肉棒に絡み付き、ねっとり愛撫してきた。

「ううッ！ な、中が……動いてす、凄いッ」

胸奉仕で限界間近だったペニスへの刺激をごまかす為に、より強く胸突起を吸ると同時にもう片方の乳首も指でねじる。

「ひゃ、だ、ダメです歩夢さ、い、イッたのに、ま、またそんな……あ、あああ！ え、エッチ過ぎますう……はあ、はあ……だ、ダメですよおそんなあ、あ、あううッ!! も、もう歩夢さんたらあ……お、お返しですよ」

こちらが胸を責めれば責める程、反撃とばかりに腰を振り始めた。

（ううッ!! や、ヤバイ……も、もうで、出るッ）

口から思わず乳首を離してしまう程の射精欲が全身を駆け回り、本能的に腰を何度も打ち上げて、張り出した尻に叩き付ける。

「あああ、んッ！ お、お尻、パチュンッて、え、エッチな音して……あ、あああ歩夢さ……はああうッ！ あああち、乳首また、ひやううううッ!!」

両手で彼女の太股をしっかりと固定し、スカートが捲れてしまう位がむしやらに腰をはねさせる。ダメ押ししの乳首吸いをする恋人は今まで以上に激しく喘いだ。

「あああ、い、イッチやいますう！ あ、歩夢さ、んうう！ イッチやいますう!!」

とうとう牛乳パックを持っていられない程に乱れ始めた真由瑠は、こちらの首に腕を回



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)



特設サイトはこちらからアクセス!!



<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!



二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!



二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリームノベルズは、全編の方向性まできまっています。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!



リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!



あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!